

令和7年 研究概要

I 研究主題

今も未来も幸せに暮らすことができる子供を育む

学び続ける子供の育成

～子供理解に基づくアプローチ～

II 子供がする授業（子供主体の授業）へ

【社会的な背景から】

これからの世界は、先行きの予想さえ困難な状況にある。情報化やグローバル化が著しく、知識や技術の進歩による第4次産業革命とも称される時代が到来している。繰り返される技術革新によって、私達の社会や生活は今後も急速に変貌を遂げていくことが予想される。このような激しく変化する時代だからこそ、新しい未来を切り拓いていく力が求められる。「どのような未来を創っていくのか、どのように人生や社会をよりよいものにしていくのか」を考えた時、主体的に学び、多様な他者と協働して、新たな価値を生み出していくことが重要であるとする。社会の変化に主体的に向き合い、自らの人生やよりよい社会を創造していくために必要な資質・能力の育成が求められる。

【研究主題及びテーマ】

そこで本校では、子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身につけ、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、研究主題及びサブテーマを「学び続ける子供の育成～子供理解に基づく教師のアプローチ～」とした。

「学び続ける」を、授業のイメージで言い換えれば「子供がする（子供主体の）授業」となる。「教師がいなくても学び合いが成立するように、今は限定的に教師が授業をしている。」と捉え、子供の「学びに向かう力」を伸ばしていく。

【子供がする授業へ『観の転換』を図る】

私達の研究の中核となる考えは「子供が主体」ということである。子供は本来、主体的・能動的な学習者であると『本気』で捉えることを出発点とする。私達教師は、無意識に「教える」ことに力を注ぎがちになり、しっかり教えないと学習が深まらないといった考えに陥りやすい。これでは、子供が本来持っている学びへの主体性・能動性を阻害することになりかねない。そうではなく、子供は適切な環境で課題を自分事として捉えることができれば、主体的・能動的に力を伸ばす有能な学習者であるという『子供観』を持ち、子供が潜在的にもっている資質・能力を自ら引き出し、伸ばし、発揮しようとする瞬間を丁寧に捉え、支援していくという『授業観』をもつことが肝要である。

【学び続けるとは】

学びは内面から発せられる問いによって先導される。そして、仲間・教師、自己等との対話の中で、対象への様々な価値に気づいたり、自己の変容を実感できたりした時（メタ認知）、期待感を膨らませ、さらに主体性を発揮する。これが繰り返されることにより、学びが更新されていく。このような子供の様相を「学び続ける」と捉える。

【「子供理解」とは】

くらしや授業の中で刻々と変化する子どものありのままの姿を受け止めることを大切にする。それは、子供の見え方や考え方、感じ方、表情、言動、既有知識等を解釈するということである。

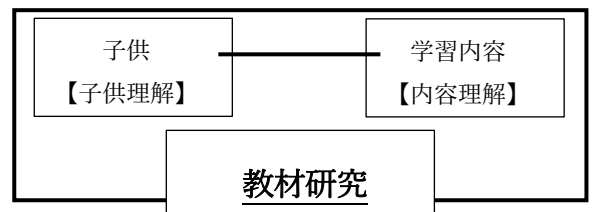
【「教師のアプローチとは】

このような子供理解に基づいて、子供が自ら伸びようとする方向性の価値に教師が気づき、支援していく。それは、子供達が持っている不明瞭であったり断片的であったりする知識を、洗練させたり統合させたりしていけるよう、教師が意図性や指導性を効果的に発揮することである。また、子供に思いのままに自由に考え試す場や、一見稚拙で遠回りに見える考えでもそれに価値を見だし寄り添い認め生かす場を保証するということである。子供が本来持っているよりよく学ぶ力を十分に発揮できるような教師の支援を総称して「教師のアプローチ」と捉える。

【子供がする授業へ向かう2つの鍵 『理解』と『覚悟』】

子供が本来持っているよりよく学ぶ力を十分に発揮できるような教師のアプローチを支える鍵は、『理解』と『覚悟』である。

右図のように、教材研究とは、子供と学習内容を有機的に結びつけることと捉えるとき、授業は子供理解だけでは不十分なことは明白である。授業は教師の内容理解を超えることはない。子供理解と深い内容理解があつてこそ、子供の発言の価値に気づいたり、子供の多様な思いや考えを繋いだりすることができ、子供達の主体的な学習活動を保障できると考える。このような教材研究の充実が、私達の考える『理解』である。



このような教材研究を土台にし、教師の敷いたレールに乗せるのではなく、教師の前に行く子供達の学びの文脈に沿って授業をすることを大切にしていく。教師の都合で子供の発言を取捨選択するのではなく、子供の発言全てに意味があると捉え、子供の思考や意欲に沿って子供に授業を任せる。これが私達の考える『覚悟』である。もちろん子供の思考をより深めるためには、深い教材研究に裏打ちされた教師の出（勝負所）を見極めることも必要である。その子らしさをそのまま受け入れ、その上でその子らしく変容することを支援していく。

【必然的なカリキュラム・マネジメント】

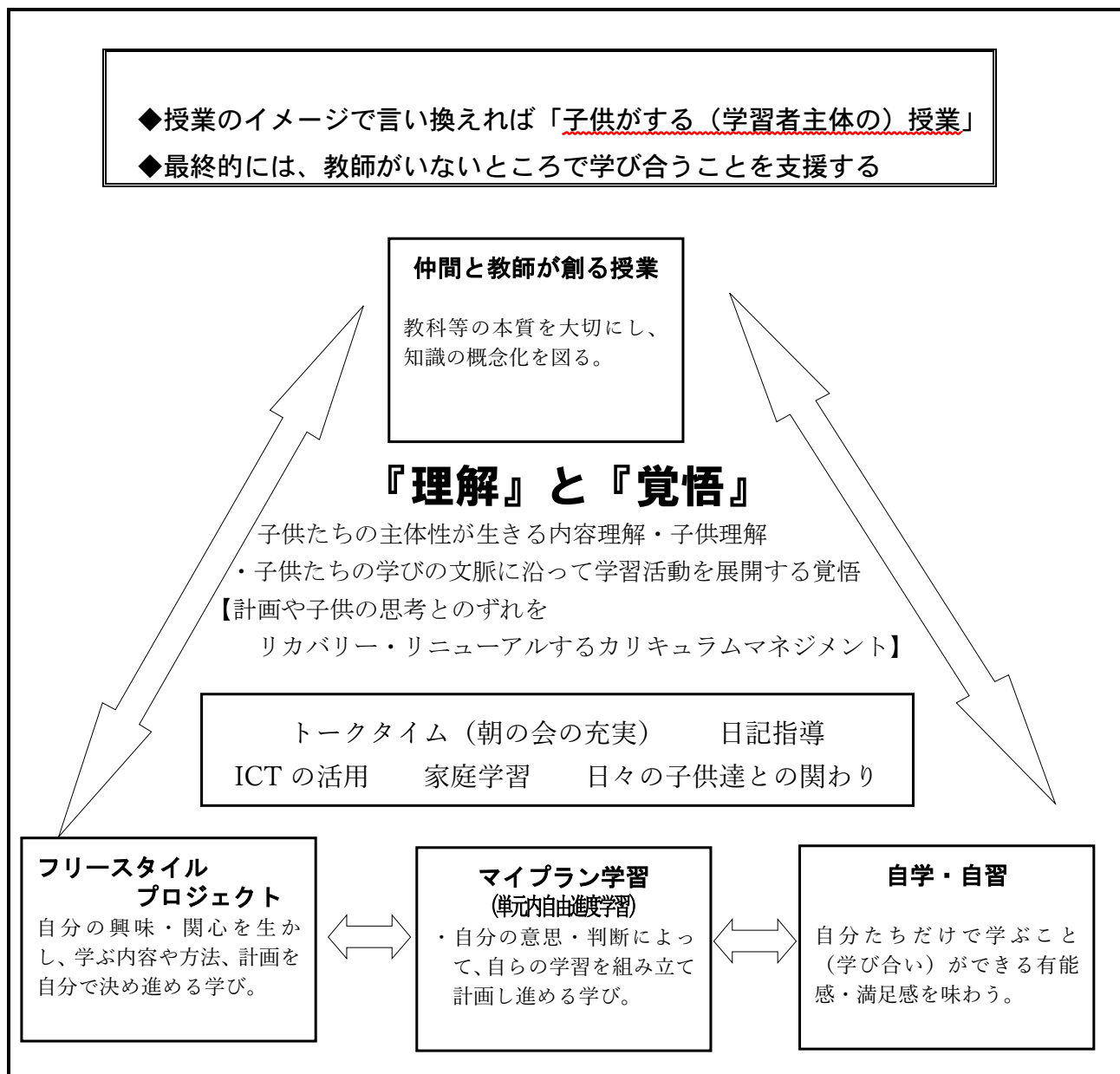
「理解」と「覚悟」を持って子供が主体の学習を展開し、資質・能力を育てようとすると、計画とずれが出ることが予想されるため、それ相応の時間が必要となる。そこで、リカバリーしたりリニューアルしたりするために必然的にカリキュラム・マネジメントが必要になる。

「小学校学習指導要領解説 総則編」ではカリキュラム・マネジメントを以下の3つの側面で整理して示している。そして、これらを通した教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことと定義している。

- ・児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと。
- ・教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。
- ・教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

【4つの授業スタイル】

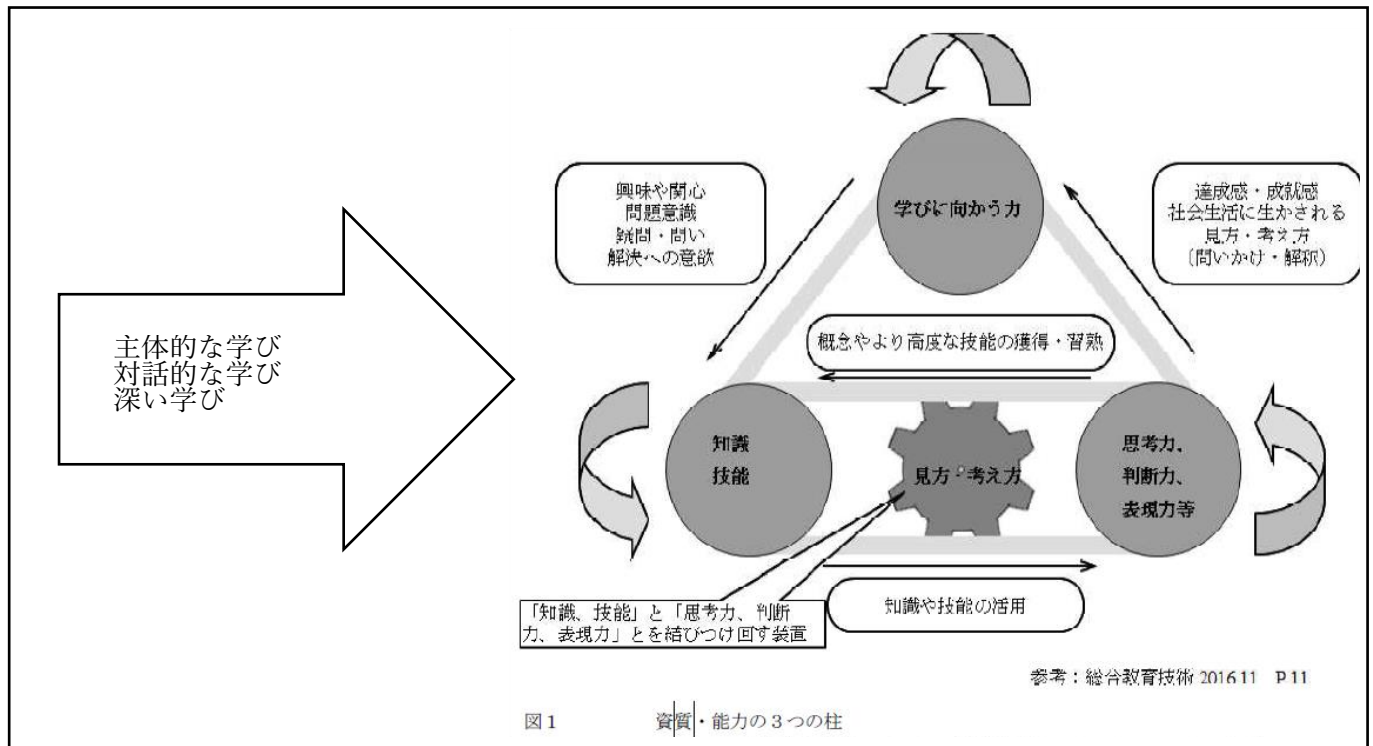
学び続ける子供を育成するために、下の図のように4つの授業スタイル【「仲間と教師が創る授業（いわゆる普通の授業）」「自学・自習」「マイプラン学習（以下MP学習）」「フリースタイルプロジェクト（FSP）」を適宜組み合わせで行う。



研究により、仲間と教師が創る授業と他の3つの授業スタイルの割合は、八割二割が丁度いいバランスであることが明確になってきた。二割は、自由であり、学んだことを試すということであり、試行錯誤であり、様々な価値や意義をもつが、子供が得るものは「自信と意欲」である。最終的に大切なのは、八割の「仲間と教師が創る授業」である。二割は八割が進化してこそ、八割は二割の成果を生かしてこそそれぞれが充実したものになるという相乗効果がある。なお、「自学・自習」「MP学習」「FSP」の概要については別紙に記載する。

【「見方・考え方」の捉え】

各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなす「見方・考え方」は、無藤隆氏が作成した下図（2016）を参考にしている。「見方・考え方」を「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を結びつけて回す装置（歯車）として捉える。【総合教育技術 11（2016）】



授業では、子供が既存の知識を生かして思考し、判断し、表現していく。そして新たな知識・技能を獲得していく。その時に働くのが、子供が潜在的に持っている見方・考え方（歯車）である。この歯車によって、「知識・技能」と「思考・判断・表現力等」ぐるぐると回って結びつき、既存の知識が概念的な知識に近づいていく。そして、「見方・考え方」自体も鍛えられていく。

内容研究によって、「見方・考え方」を明らかにし、資質・能力の育成を見据えて、見方・考え方を意識して授業をデザインすることが大切である。もっと言えば、子供達のたどたどしい表現の中に教科等の見方・考え方の芽を聞き取り、意識して繰り返し学習の中でそれを使って育てていくことが肝要である。

【「朝の会」の時間的・質的な改善と充実】

朝の会を8時20分～8時35分に「トークタイム」の時間を設定する。「トークタイム」は、「子供がする授業（子供主体の授業）」の基盤として、話題に沿って子供が質問・疑問や自分の考えを述べ合い聞き合うものである。子供の表現力を生活の中で高め、自分の思いを存分に話せる子供を育てる。また、「分かり合い、支え合う」仲間関係をつくることも大きなねらいとする。学びとくらしを融合し、子供主体の授業づくりに繋げる。「トークタイム」には決まった型は設定していないが以下のような取り組み方が例として挙げられる。型を固定せず子供の実態に合わせて取り組み方を考えていきたい。

①おたずねの時間

「おたずねの時間」は奈良女子大附属小学校の朝活動などの時間に行う、スピーチ形式の話し合いの時間である。

1人が発話者となり、「自己紹介」や「日記」などを題材に発表を行う。聞き手となる児童は、発話

者におたずね（質問）を行い発話者の考えを広げたり深めたりしていく。発言の内容を基本的には担任が板書を行うが、自学自習につなげるためにも子供が板書をする機会を設けることも効果的である。

〈おたずねの時間から見えてきた成果や課題〉

- ・友達からおたずねを受け、答えることを繰り返すうちに自分に自信がもつことができると同時に、学級全員が、自分に関心をもってくれるという実感を味わうことができる。達成感を味わい、自尊心も高めることができる。
- ・「おたずね」で特定の子のみで進んでしまうこともある。でも、友達の発言やおたずねの返し方見て学び、少しずつ発言できる子が増えていく。「そのことは調べていないので、明日までに調べて分かったことを発表します。」「ぼくは分からないので、誰か知っている人はいませんか。」「詳しく答えられませんが、たぶん〇〇〇だと思います。」など友達を真似て自ら表現できるようになっていく。
- ・おたずねの質を高めるためには、教師が聞き役に回るだけでなく、教師がおたずねの範を示して発表者の内面に潜んだままになっている意味ある言葉を引き出していくことも必要である。「〇〇のところをもう少し詳しく教えて欲しい（掘り下げる）」「△△とはどういうことですか？（根本を問う）」「どうして～のように考えようと思ったのですか？」（相手の思考の仕方を探る）など教師が範を示すことで聞き手を育てることも必要である。
- ・子供の板書の経験が増えると子供だけでおたずねの時間を進めることも可能である。しかしながら、子供のおたずねの質が高まらないまま子供に任せてしまうと表面的なおたずねになってしまい、おたずねの質は高まらない。
- ・イメージをもつためにもおたずねの動画（パブリックにあります。）を参考にするのも効果的である。実態に合わせて動画を子供に見せたり、学級・学年の枠を超えて互い見合ったりするのも効果的である。

②フリートーク

フリートークは筑波大学付属小学校国語科教諭である桂氏が考案した対話形式の話し合いの時間である。

様々なテーマを設定し、テーマに沿って子供たちが発言をすることになる。テーマは教師が中心に決める場合もあるが、テーマを設定する子供を決めるなど子供にテーマを決めさせる場合も考えられる。テーマについて桂氏（2021）によると次のようなテーマ設定が考えられる。

・情報提供型の活動

「おすすめの本はなんですか？」など、自分の考えや経験をみんなに伝えたり、みんなの意見を聞いたりする活動。はじめての対話型活動におすすめ。

・悩み型の活動

「朝なかなか起きられないけれど、どうしたらいいか？」など、話題提供者の悩みをみんなで話し合う活動。同じような悩みを抱える子供が多いので、共感しやすく、温かい雰囲気での活動になる。

・想像型の活動

「もし100万円あったら、何に使う？」など、経験に加え、想像力を膨らませて、自分なりの意見を伝え合う活動。想像力を自由に膨らませることがポイント。

・対話型の活動

「スマホをもつのは、賛成か反対か」など、対立する課題に対し、自分なりの意見を決めて話し合う活動。自分と同じ考え、または相反する考えに対して、相手の考えを意識して話したり聞いたりしなければならないので、論理的な思考力が求められる。

【子供理解を深める日記指導】

子供が今、何を考え、何を感じ、どのような気持ちで生活をおくっているかを知り、それを受けとめることで、くらしや教材研究、子供と担任、子供と子供の関係作り等に生かしていく。「日記指導」は、「子供がする授業（子供主体の授業）」の基盤と捉える。

日記を継続していくために…

- ・間違い（言葉の使い方や、漢字、構成法、マス目の使い方など）をあまり指摘しない。「書くことは考えること・生きること」と捉えてみる。日記を書く意義に戻る。
- ・最初は2、3行しか書けない児童もいるがそれでもよい。書くことに抵抗感をもつよりは、書いてきたことを褒め、徐々に題材の持ち方や、詳しく書く方法を伝える。
- ・ほめて、書く気持ちを高める。個人的にほめたり、紹介してほめたりする。朝の会や帰りの会、給食の時間等を活用して、読み聞かせたりコピーを配布したりする。どこが良かったか、子供に問いかけるのも効果的であった。（コピーの配布には本人から同意を。）
- ・題材が見つからない児童もいるが、子供の意欲を育てながら、日記に何を書きたいか心の片隅で考えながら暮らす子供に育てたい。また、同じテーマで書かせることで、それぞれの考え方や感じ方の違いを知ることでもある。